

講義年月日 2005年4月12日(火)

講師 牛崎 進(立教大学図書館事務部長)

テーマ 図書館経営の案件 - 様々な視点から大学図書館の位置と意味,  
図書館員の役割を探る

## 講義内容

### 1 21世紀の私立大学を占うキーワード

- ・大学間競争・雑誌各社、予備校、第三者機関、海外の格付会社等のランキングは数値が一人歩きする傾向にあるが、これを上げる努力も必要。
- ・大学のコンテンツ整備、強化・私立大学は教育機関である。いいカリキュラムのもとでいい教育を 教員を学生が評価する制度も有効。社会人向け講座など教育に予算を集中投下すべき。
- ・企業との連携、地域へのアピール・還元も必要。
- ・ブランディング強化・卒業生等への働きかけも必要。
- ・教育におけるネットワークとキャンパスへの依存度の調整は必要になってくる。つまりキャンパス整備とネットワークの充実は常にてんびんにかけることになる。
- ・収支構造の改善・立教カードというものがあり、グッズ等の売り上げの一部が大学にバックされる。また立命館大では人件費率40%を目指している。
- ・教授会で決めるのはカリキュラム等の教育のことに権限を狭められてゆくので、職員が経営で果たす役割が増していく。

### 2 大学図書館の原点の確認 - 大学にとって必要不可欠な図書館へ

- ・情報源へのアクセス保証・実際に情報を手に取れるかが重要。シラバス掲載の参考文献の複本提供が必要になるが、実際にはスペースとの相談になる。データベースの共同利用を進めていく必要もある。

事務経費とのバランスではあるが、ILLの学内者無料化(立教でも年間100万くらい)ができないか検討してもよい。

- ・空間と施設の整備・図書館側としては図書の収納限界数を決めてはどうか。 超えたら廃棄へ

立教では1つのキャンパスにあれば、複本は廃棄。年間1万冊、約5000万円分を廃棄している。複本の次の段階 複本ではないが廃棄を検討する、したがって内容の選定に入る必要が出てくる。その際、貸出履歴を用い利用の少ないものから処理をしていくことも検討対象となる。

夜間・休日開館・社会人向けに考えていく必要がある。

2007年成蹊大で50万冊の自動書庫立ち上げ。立教でも新座に20万冊分の自動書庫増築決定。

- ・十分なフリーアクセスの確保、つまり出来るだけ開架に資料は確保すべき。  
なぜならOPACの情報は名刺程度の情報にすぎないので。  
学生が学校に来るようになった 居場所としての座席の確保を図書館が考える必要が出てきた。
- ・情報リテラシー獲得支援・・東北大学 情報リテラシーの本を出版している。

### 3 大学図書館を支える職員

- ・図書館予算の増額は難しい。したがって人件費を含む大学図書館運営総経費の再配分が課題である。
- ・職員数の適正規模・・大学にとって図書館を充実させることの意義がどこまで経営陣に共有されているかが、図書館職員の採用・配置・適正人数確保に直結する。  
ラインとスタッフ（専門職）の併用をして行くにあたり、給与を含めた処遇をどうするか考えなければならない。  
「専任職員業務」への思い込み 専門性の高い業務は専任でしか実現できないのか、むしろアウトソーシング向きということもあるのでは。立命館大はレファレンスもアウトソーシングしている。